

## 「魔女」論の現在

秋田大学 佐々木 和貴

本稿<sup>1</sup>の目的は、初期近代英国における魔女或いは魔女狩りという歴史的事象の解釈をめぐる近年の議論の展開を概観し、さらにはそれが同時代の英國演劇研究にいかなる可能性をもたらすかについて考察することにある。

いわば初期近代西欧のオブセッションともいえる魔女（狩り）をめぐっては、これまでに様々な解釈・説明がなされてきた。しかし70年代初頭に英國の歴史家A・マクファーレン及びK・トーマスが提示した解釈<sup>2</sup>は、これまでの例えはM・マレーに代表される「前キリスト教的異端者」＝「魔女」といったグリム/ミシュレの系譜の人類学的解釈<sup>3</sup>に代わって、この歴史的事象に経済学・社会学的視点を導入したという点で、まさに画期的であったといえるだろう。すなわち、彼らは共に宗教改革以前の農村の「相互扶助の伝統」"Neighbourliness"から、それ以降の新しい規範としての「個人主義」"Individualism"へという、初期近代英国に生じた倫理観のいわばパラダイムシフトに着目し、そこに当然生じる社会システムの軋轢から魔女（狩り）という事象を解き明かそうとしたのである。例えばK・トーマスの

The fact that she should be accused of witchcraft, by the very people who had failed to fulfill their accepted social obligations to her, illustrates the essential conflict between neighbourliness and individualism which generated the tensions from which the accusations of witchcraft were most likely to arise.<sup>4</sup>

といった説明など、その典型といえるだろう。しかし彼らの膨大な歴史的資料から割り出した見事なまでに「合理的・科学的解釈」には、にもかかわらず、重要な盲点が潜んでいた。つまり魔女は何故かくも危険視されたのか、また何故大半女性のみが迫害されたのか、つまり「権力」及び「女性」への意識が（時代を考えれば当然ともいえるのだが）、ほとんど欠落していたのである<sup>5</sup>。これに対し、80年代にはいると、初期近代の英國演劇を研究する歴史主義的

フェミニスト或いはそれと問題意識を共有する批評家たちは、こうした問題系に意識的に焦点を当てる形で、当時の劇に登場する魔女（狩り）表象を論じ始めた。すなわち、歴史家のジェンダーおよびポリティックスへの視線を欠く魔女（狩り）像に修正を迫ったと言えるだろう。例えば、新歴史主義の俊英P・ストリプラスは、その画期的*Macbeth*論で魔女表象を論じて

Witchcraft accusations are a way of reaffirming a particular order against outsiders, or of attacking an internal rival, or of attacking 'deviance'.... it is particularly working upon, and legitimization of, the hegemony of patriarchy.<sup>6</sup>

と、早くも82年に父権制の問題抜きには魔女（狩り）は語れること、またそれが他者表象の問題に他ならないことを指摘し、こうした動向に先鞭をつけている。さらにはほぼ同時期に英國では、フーコーの影響下に犀利なフェミニズム批評を展開するC・ベルジーが

The English Witchcraze, the demonization of women who were seen as voluble, unwomanly and possessed of an unauthorized power, is coterminous with the crisis in the definition of women and the meaning of the family ... witches were also women who failed to conform to the patriarchal ideal of femininity.<sup>7</sup>

と述べ、「父権制への反逆者としての魔女」という視点を明確に打ち出している。つまりこうした新しい批評は、ミメーシスとしてではなく、より象徴的なものとして捉えることによって、魔女（狩り）表象に潜む父権制の権力構造を探り当てたといえるだろう<sup>8</sup>。

さて、80年代におけるこうしたフェミニズム的視点の導入により、我々は魔女表象の分析を介して、歴史的事象としての魔女（狩り）自体を捉え返す枠組みを手に入れた。しかしこの「魔女」=Rebellious Proto-feminist against Patriarchyという枠組みには、言うまでもないことだが、明解さ故の有効性と表裏一体の形で、単純さ故の粗雑さが透けて見える。のみならず、この枠組みを援用して父権制を批判するフェミニストの側にも、「歴史上の魔女」と「魔女的な女性

「登場人物」を意識的に、或いは意識せず混同している傾向も見受けられた。従って、「新しい歴史学」における民衆文化研究の進展と連動する形で初期近代における魔女の概念の持つ多様性・異種混交性が明らかになりつつある今、それに留意してこの枠組みを批判的に継承していくこと、つまりより徹底して魔女を「歴史化」していくことこそが、90年代に向けて歴史主義的フェミニストたちの批評課題のひとつであったことは、例えばK・マクルスキーの魔女（狩り）研究の示唆するところである。彼女は89年に、エリザベス・ソーヤーという十七世紀に実在した魔女の迫害の記録を題材にした悲喜劇『エドモントンの悪魔』を取り上げ分析したが、そこではまさに劇中に当時の魔女概念の多様性＝階級的差異がどのように構造化されているかが論じられているのである<sup>9</sup>。そしてD・ウィリスの近著 *Malevolent Nurture: Witch-Hunting and Maternal Power in Early Modern England* (Cornell UP, 1995) は、こうしたマクルスキーの路線を継承しつつ、魔女狩りについて独自の立論を展開しており、現時点における最新の「魔女」論の成果といえるだろう。そこで以下において、やや詳しくその紹介・検討を試みたい<sup>10</sup>。

まずその特徴は魔女表象を、一枚岩的なものとして捉えず、とりわけ階級で差異化するというスタンスにあるといえるだろう。彼女自身の

I attempt in this book to distinguish between different types of discourse about the witch and to demonstrate that representational strategies tended to vary according to the class and gender positions of their authors.<sup>11</sup>

という宣言にあるとおり、当時の魔女概念の異種混交性に留意しつつ、多様な「魔女」をめぐるディスコースの表象戦略を 明らかにすることこそが、この批評書の第一の狙いなのである。従って、その章立てと概要は以下の通りとなる。

#### 1章 Introduction

#### 2章 (Un)Neighborly Nurture

#### 3章 Rewriting the Witch

#### 4章 James among the Witch-Hunters

#### 5章 Performing Persecution

Village-levelでの魔女像

Gentry-levelでの魔女像

Aristocratic-levelでの魔女像

主として *Henry VI* 三部作論

#### 6章 Strange Brew

#### Macbeth 論

とりわけ、プロテスタントの牧師のパンフレットの分析を通して、農村共同体における魔女像が知識階級の魔女像へどのように変換されているかを示す第3章、および『悪魔学』におけるジェームス一世の神学的魔女像に、二人の強力な母すなわちスコットランド女王メアリーとイングランド女王エリザベスと彼らとの複雑な関係が落としている微妙な影を読みとる第4章は秀逸である。ディスコースの表象戦略に対するウィリスの鋭敏な視線によって、当時の「魔女」像の多様性・異種混交性が浮かび上がってくるこの二つの章だけでも、これは読むに値する批評書と言っていいだろう。しかし何といっても、著者ウィリスが最も力点を置いている、そして同時に恐らく賛否の分かれるのは、村落共同体における魔女像について、斬新な議論を展開している第2章である。なぜなら、ここで彼女は、従来の歴史主義的フェミニスト達の魔女狩りの枠組み、即ち *Rebellious Proto-feminist vs Patriarchal Conformist* が必ずしも実際のケースに対応しないことを、一次資料の読み込みによって明らかにしているのだ。そしてその上で、どのような形で魔女狩りが発生するのか、そのメカニズムを

When accuser refused the old woman who came to her for food or help, she also replay a hostile attack on the figure who gave her life, food, support in childhood and who provided her with a basis for her own identity. The misfortunes construed as punishments for such refusals regularly involved the loss of things a child envies about the mother's body and believes she controls.... Having injured the old woman, the accuser came to fear that her own extended maternal body was threatened by a mother far more powerful than herself.<sup>12</sup>

と、極めて心理学的に説明しているのである。つまり彼女はメラニー・クラインに大幅に依拠しながら、初期近代英国に於ける村落共同体の魔女とは、その構成員が「邪悪な母」 "Perverse mother" への恐れを投影した老女に他ならないと大胆に推測しているのだ。さらにはクラインの「敵意ある乳房」という知見<sup>13</sup>を援用して、例えば英國の魔女特有の、乳の代わりに血を与えて養う使い魔 (Familia) とは何か、あるいはイギリスの魔女裁判では何故「乳首状の魔女の印」 (Nipplelike Witch Mark) が問題となるか等、今まで必ずしも説明のつかなかつ

た問題が、「邪悪なる母への恐れ」という視点から解明されると主張するのである。ところが、この洞察を可能にしたクラインの心理学こそが、この第2章の説得力の源であると共に、その問題の所在でもあるとは言えないだろうか。なぜなら、ウィリス自身もイントロで認めているように<sup>14</sup>、19世紀末ウィーンに源を発する精神分析という装置を16・7世紀に無条件に援用することは、たとえルネサンスから初期近代へと名称を変えることで18世紀以降との連續性を強調しようとも、一種のアナクロニズム以外の何者でもなく、ましてそれを立論の中核に据えることの当否は、当然議論の分かれるところであろうからだ。しかし、援用の当否はともかくとして、少なくとも魔女表象のさらなる差異化へ向かうウィリスの議論の方向性は支持されるべきであろう。また彼女の仕事が、フェミニスト批評がどのようにして新歴史主義を領有していくかという、90年代における大きな批評課題への一つの解答足り得ている点を考慮すれば、魔女（狩り）をめぐる研究の90年代における一つのモデルとして、この批評書が参照される確率はかなり高いように思われる<sup>15</sup>。

さてそこで最後に、こうしたウィリスの示唆する方向性をも踏まえて、魔女表象という視点から初期近代の英國演劇を読解するとすれば、今後どのような展望が可能であるかについて素描してみたい。

まず、魔女概念のさらなる差異化については、ウィリスがごくわずかしか触れていないシェークスピア以外の同時代の劇作家たちのウッitch（クラフト）劇を取り上げ、そこに構造化された性差・階級に基づく差異を分析することが、次のステップとなろう。またさらに展開して、そこで明らかになるであろう表象の多様性・異種混交性、即ち表象に内包される不連続性から、アルチュセル/ジェームスン・モデルに従って、当時ロンドンで生じていた複数の階級の文化の共存、葛藤状態を兆候的に読みとることも可能ではあるまいが<sup>16</sup>。

また、ウィリスの提唱する「邪悪なる母」としての魔女というコンセプトについても、無条件に賛同は出来ないものの、多様な発展・適応の可能性を秘めているとは言えるだろう。従って、例えばC・ベルジーのように、ジャコビアン悲劇の魔女的なヒロインたちに、Man=Speech / Woman=Silenceという差異化のコードの侵犯者を読み取るのではなく、そこに「邪悪なる母」をめぐる幻想

の投影を読み取るという、いわばウィリスに倣ったアプローチも当然あり得ると思われる。

さらに、この魔女という表象を、当時の劇にしばしば登場し、しかも同様に有徴性を帶びている娼婦(Whore)および寡婦(Widow)の表象と組み合わせてみることで、父権制下における女性の多様な在りようへの新たな視点が設定できるはずである。たとえば、娼婦を、ネガティブだが制御可能な、従って父権制を一見攪乱するかに見えて最終的には補完する役割を担った装置として、同じネガティブな女性表象でも、反国家（＝反家族）的存在として父権制にとっては根本的に制御不能な、従って抹殺されるべき魔女と対比的に捉える視点、あるいは寡婦を、主婦にも娼婦にも移行できるその社会的流動性故に、父権制にとって潜在的な危険をはらんでいる装置として、魔女のヴァリアントと捉える視点等、様々な可能性が開けてくるのではないか<sup>17</sup>。

以上、ウィリスの「魔女」論を中心に魔女（狩り）をめぐる近年の議論の展開と今後の展望を略述してきたが、これだけでもこの問題が我々にとって周辺的あるいは好事家の話題であるどころか、階級・性差・父権制・他者表象など現代批評における主要な課題へ赴くための、重要な糸口となりうることが明らかになったと思われる。そして魔女（狩り）が、このように多様な問題系列が交錯するまさにアクチュアルな表象空間であるがゆえに、我々は今後も根気強く「魔女論の現在」を追い続けて行かねばならないだろう<sup>18</sup>。

## 注

- 1 本稿はイギリス・ルネサンス研究会(96/3/23於成蹊大)における特別シンポジアム「ルネサンス研究の現在」での口頭発表に加筆訂正を加えたものである。多くの有益な助言を頂いた、司会の大橋洋一氏並びに幹事の小野俊太郎・末廣幹両氏、そして会員の皆さんにこの場を借りて感謝の意を表したい。
- 2 Alan Macfarlane, *Witchcraft in Tudor and Stuart England: A Regional & Comparative Study* (1970; Waveland Press, Inc., 1991) & Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (1971; Penguin Books, 1978).

- 3 Margaret Murray, *The Witch-Cult in Western Europe* (OUP, 1921).
- 4 Thomas 662.
- 5 もちろん歴史家の側でも「権力と女性」をめぐる問題への取り組みが皆無だったわけではない。例えば80年代にはいるとChristina Larnerは、魔女狩りは 'sex-specific' ではないにせよ 'sex-related' であることを認め、魔女へのシンパシーにおいて際だつた *Enemies of God: The Witch-hunt in Scotland* (Chatto & Windus, 1981) を発表している。
- 6 Peter Stallybrass, "Macbeth and Witchcraft" in *Focus on Macbeth* ed. John Russell Brown (Routledge, 1982) 190.
- 7 Catherine Belsey, *The Subject of Tragedy: Identity and Difference in Renaissance* (Methuen, 1985) 185-6.
- 8 なお、歴史主義的フェミニストによる魔女表象研究については、末廣幹「新歴史主義とフェミニズム」*Otsuka Review* 26(1990) 134-145 に詳しいので、参照されたい。
- 9 Kathleen McLuskie, *Renaissance Drama* (Harvester Wheatsheaf, 1989) 57-86.
- 10 既にそのエッセンスは "Shakespeare and the English Witch-Hunts: Enclosing the Maternal Body" in *Enclosure Acts: Sexuality, Property, and Culture in Early Modern England* ed. R. Burt & J.M. Archer (Cornell UP, 1994) 96-120 で公刊されており、コンパクトなぶん議論が分かり易く整理されているので、こちらも参照されたい。
- 11 Willis 13.
- 12 Willis 48.
- 13 メラニー・クライン「離乳」「メラニー・クライン著作集3」(誠信書房、1983年)  
55-74を見よ。
- 14 Willis 21.
- 15 ただし、J. Adelman のやはり「邪惡なる母」をめぐる出色的のシェイクスピア論である *Suffocating Mother: Fantasies of Maternal Origin in Shakespeare's Plays, Hamlet to The Tempest* (London: Routledge, 1992) に絡んで展開される後半の作品論は、Adelmanと同じ土俵で、しかもその説に異を立てるのは、Willisならずとも至難の業ではあろうが、独創性豊かな前半に比べて些か凡庸という印象を否めない。従って、本書が今後魔女(狩り)論としてではなくシェイクスピア批評の分野で参照される可能性の方は、残念ながらさほど高くはあるまいと思われる。
- 16 拙稿「ジャンルの不連続性とアイロニー：トマス・ミドルトンのシティ・コメディをめぐる一考察」『秋田大学総合基礎教育研究紀要』第3集(1996) 11-17 は、A *Chaste Maid in Cheapside* を題材に「ジャンルの不連続性」という視点から、同様の方向を模索した論文なので参照されたい。
- 17 こうした視点については、第34回シェークスピア学会(1995年、於 広島女学院大)セミナーB「トマス・ミドルトンをめぐって」に参加した際の、メンバー相互の(とりわけ小野俊太郎氏との)ディスカッションから多くの示唆を得たものであることを付記しておく。
- 18 例えば、本稿では取り上げなかったが Diane Purkiss の *The Witch in History: Early Modern & Twentieth-century Representations* (London: Routledge, 1996) は、魔女を男性だけでなく女性の恐れ、欲望、幻想をも担うものとして捉え返す興味深い視点から、初期近代と現代に跨る広い領域で手堅いリサーチを行っており、Willisとはまたひと味違った、英国のフェミニズム系魔女論の最新の成果として注目に値すると思われる所以、参考されたい。